

---

# 石川三四郎著作集

第6卷

回想

---

月	4	報
---	---	---

---

軍国主義下の老子伝  
戦後の石川先生  
坂をのぼる葬列  
石川さんのはなし  
二等兵が語る  
石川先生の想い出

鶴見俊輔 1  
栗原貞子 8  
緒方昇 11  
下中弥三郎 13  
鈴木晋平 14

---

青土社

---

## 軍国主義下の老子伝 鶴見俊輔

石川三四郎の著作の中で、『東洋文化史百講』、『近世東洋文化史』は、手に入れることがむずかしく、私はながいあいだ読みたいと思いつつも、読むことができないでいた。

二年ほど前に、大沢正道氏から借りて、ようやく、読むことができた。

ことにその老子伝のくだりは、石川さんが昭和の戦争の十五年をどのようにすごしたかのその精神のうねりをつたえる重要な著作だと思う。

石川は、「老子の思想が支那民族の精神生活に影響したことは到底儒教なぞの及ぶところではありません」と書く。こうして「第十八講 老子伝」は、東洋文化史百講の中のかなめの位置におかれる。

孔子の思想は人間を機械的に利用する手段として用ひられ、人間生活の表面的形式に重点を置く傾向を持つのであるが、老子の思想は寧ろ形式を解脱して自由と平和を得せしめようとする。孔子は政治的であるが老子は哲学的であります。孔子は国家主義的であるが、老子は個人主義的であります。両者とも社会的調和生活を説きながら、実際的態度は対蹠的なのであります。

石川によれば、老子は南方支那及びビルマの方面の民族的伝統を中国にもたらした人であるとして、その小国寡民の社会思想、静寂柔弱の徳、武力否定の平和主義、五音五色五味を排斥する禁欲的方便論の由来を、さまざまの根拠をひいて推理する。

老子の思想の起源についての石川の議論がどれほどにたしかなものか、私にはわからないが、その影響力についての考察にはうなずけることが多い。

漢の天下になつてから、皇室は統治の手段として儒教を重んじたけれども、皇室みずからがその日常生活においてはむしろ老子の道教にひかれ、これを信奉してくらししていたとする。さらにその後、中国に仏教がひろまってからは、仏教をとおして、老子の思想がひろまっていったとする。

併し、それよりも、何よりも重大なことは、老子精神が支那文化の根本精力となり、支那民衆の生活基礎となつて、爾来今日に至るまで強力な包容力となつたことである。否な支那史の過半は被征服の歴史だと言つても差支えありません。黄帝を初め、周も、元も、清も、それでありませぬ。然るに何れの征服者も武力を以ては征服したが、文化に於ては征服されて了つたのです。最も近い例を引けば、満洲朝廷たる清朝は幾百年かの間支那民族を統治したと思つたであらうが、何ぞ計らん、文化の上から言へば実に支那に併呑されて了つたのであります。そして満洲そのものも亡び、満洲語そのものまで忘れてしまつたのであります。『支那』の偉大な包容力こそ歴史上の一大驚異であります。この点こそ支那文化史を研究するもの最も注意せねばならぬ事象であると思ひます。

「最も近き例を引けば」として、石川はこの本で清朝の例をひいているが、実はもっとも近き例は、日本軍の中国侵略だつた。

この本がどういふ状況の下に於て書かれ、どういふ状

も多く参加してつづけた東洋文化研究とはさかさまの方向にむかう東洋文化への回帰の可能性を示した。

当時は、『老子概説』と銘うたれた本でも、天皇をいただいて中国に聖戦をつづける日本の国家が、老子思想を今日の世界にもっともよくつたえたる思想であると書いていた、そういう時代なのである。

五年ほどの研究の後に、石川三四郎六三歳の時に、『東洋文化史百講上』が育成社弘道閣から出版された。一九三九年（昭和十四年）一〇月である。この中に、老子伝はおさめられている。もう一度、石川の叙述にかえらう。

支那の威力はその「后土」にあります。支那四千年の歴史を支配する偉大な文化力は「井を鑿りて飲み、田を耕して食ふ、帝力我に何かあらんや」といふ精神にあります。この精神を宇宙観、人生観にまで精成し、悟道の法悦にまで純化したのは実に老子であり、そしてその哲学の基礎を后土の深底から築き上げたのが老子であります。「上善は水の若し、水は善く万物を利して而して争はず」「古の道を執つて以て今の有を御す。能く古始を知る。これを道紀と謂ふ」「功成り事遂げて、百姓我を自然と曰ふ」「天地相合ひ、以て甘露を降す。人之を

況の下に出版されたか窺見れば、著者の言いたかつたことが、一点、一点、同時代の日本でもっとも言いにくいことであつたことがわかる。

老子の思想が原動力となつてひろまつた被征服者の政治力への着目は、まさに一九三一年以来、この本の出版された一九三九年まですでに八年にわたつて中国において滲透していた思想の形態であつて、そのような民衆思想に対して日本軍の攻撃はやがてやぶれてゆくという見とおしを平然と老子伝に託してのべている。

一九三一年の満洲事変をもつてその後十五年に及ぶ中国侵略がはじまると、石川は満洲侵略のがいこつ踊りを自分で漫画にかいて『ディナミック』にのせ、発禁とされた。一九三四年一〇月の第五九号まで刊行はつづけるが、発禁される事が多く、言論の活動も不自由になつてきた。この間にもう一度、ヨーロッパに行こうとして、一九三三年一〇月一六日に神戸から出発したが、途中で中国に滞在すること三ヶ月、中国を見るうちに自分が東洋の伝統について知らぬことを痛感し、東洋文化についてしらべて書くことに発心し、一九三四年一月に日本にもどつた。

この時から石川の東洋文化史研究がはじまり、それは、同じ時代に政府が助成し指導し、それに左翼からの転向者

せしむる莫くして而して自ら助し」「天下道あれば走馬を却けて、以て就（耕作に用ひる）。天下道なければ、飛馬効に生ず」「民飢うるは、其上、税を食むこと多きを以て、是を以て飢うるなり」「天の道は争はずして、而して善く勝ち、言はずして而して善く応じ、召すして而して自ら来り、坦然として而して善く謀る。天網恢恢、疎なれども失はず」「弱の強に勝ち柔の剛に勝つ、天下知らざる莫きも、能く行ふなし。」

凡そこれらの諸句は皆無為自然の道を説いたものであります。古の道といひ、古始を知るといひ、天地相合ひ甘露を降すといひ、争はずして勝つといひ、弱能く強に勝つといふ。凡そこれは海洋の如き広い心持でなければ為し得ないところでありませぬ。「江海の能く百谷の王たる所以は、その善く之に下るを以ての故に、能く百谷の王たり」といふ心境こそ之れを能く言表してゐるのであります。それは実に政治否定、国家否定の宇宙大道の宣揚であります。そしてこの精神こそ、彼の世界無比の長い歴史と広大な地域とを持つた大文化を成し來つた所以であります。

老荘の学は神農学とも呼ばれるが、それは実に「后土」の自然力に全幅の信仰を捧げて、「帝力我に何かあ

らんや」と歌ふところの神農的精神が老荘の古始道、抱朴教と一致する故でありませう。伏羲や神農が象徴化する平和な文化と黄帝や周朝の伝へた武力文化とが対蹠的なものであることは繰返して述べましたが、周公を理想とした孔子は支配階級から信用せられて文宣王と号せられし政治の標識とされて来ました。老子の思想は水の如く空気の如く支那全民衆の中に浸透して全支那を育み且つ支配してゐるのであります。

「后土」とは、このごろ米国のヒッピーの旗頭ゲイリー・スナイダーの説く「バックカントリー」のことか。ここで説かれていることは、古めかしくきこえるかもしれないが、古びていると言えば数千年の古さであり、同時に、今日の新しさでもある。

『東洋文化史百講』の第二巻は、一九四二年七月に発行された。

その第三巻は、一九四四年五月に発行された。すでに昭和一九年五月と言えば、十五年戦争も末期である。

おなじころ、石川三四郎は、野鳥の会の中西悟堂あてに、こんな葉書を書きおくっている。

と言うのをきいて、その言葉に納得できた。戦時中の言論を考えると、マルクスを説くのが、カントを説くのが、日本人の言うことは信頼できないというのがよくわかるし、その状態は、敗戦後といえども、それほどかわつてはいない。七〇年代の学園闘争の後で、大学教授たちの言説のかわりかた、闘争を指導した学生たちのその後、社会人となつてからの言説のかわりかたと考えあわせれば、この集団の動向本位にいくらでも自分の言説をかえてゆくという傾向が日本ではそのまま今日ものこつていっていることがわかる。

このような状況の中で石川三四郎を見る時、石川三四郎の思想は、他の多くの思想家とちがう重さをもっている。彼が、青年の時に影響をうけた民主主義者カーペンターを、彼は戦争中にさえもぬぎすてることがなかったし、彼がそのような人であったからこそ、平然として、老子を、戦争中も自宅で講じつづけたと言える。

田中正造に対するうちこみかたも、明治末とかわるところがなかった。この著作集第八巻の月報に北沢文武の書いた「私の石川三四郎論」には、田中正造の直弟子島田宗三あてに石川三四郎の書きおくった手紙が引かれている。

其後お変わりなきことと存じます。さて来る二十日（土曜日）午後六時より蘆花公園に於いてカーペンター生誕百年を記念すべく、四、五人の小集を催すことになりました。御来会下されば幸いに存じます。時節柄食事の用意が出来ませんから各自御用意願います。右御案内まで。昭和十九年四月・一七 世田谷区船橋町七七四 石川三四郎（中西悟堂「私の石川三四郎さん」本著作集第五巻月報）

明治、大正のころとかわりのないふつうの石川三四郎である。すでに七〇歳に近いから戦争にひっぱられる心配がないのでこんなふうにしていられたのだらうとか、マルクス主義者とちがつてアナキストだから当局から大目に見られていたのだらうという推測は、あたつていただらう。しかし、同時に、七〇歳をこえた多くの旧自由主義者、民主主義者が、まなじりを決して自由主義撲滅、鬼畜米英撃滅を叫ぶ文章を書いていたのである。

私は、戦後のメキシコで、かつて日本軍占領下の中国にいたというKという中国の学者に会つた時、

「日本人は個人として会つと、とてもよい人でも、集団になると何をするかわからない」

今日の日本の指導者の無智無常無見には笑ふに笑はれぬ哀れさがありますが、併し、その中には、天の為さしめる真実が寧ろ暗示、暗示されるのは面白いです。田翁（田中正造のこと）、今生存し給はゞ何と言ふらん。（一九四四年六月三日付）

併し素人考えでは、もう余り長くはないでせう。メリケンさんが本土大陸でも試みれば、恐らく致命的打撃を蒙つて、戦争そのものが終幕となりはせぬか、私はこんな風に考えてあります。兎に角、これを機会に日本人は深く反省し悔改すべきであると思ひます。その意味に於て、これは日本の為に好き戦争であり、メリケンさんに感謝すべきであります。（一九四五年六月一日付）

あと三ヶ月もすると、日本の政治家、学者、ジャーナリストのおおかたは、こんなふうを書くことになるのだが、日付は戦争の一九四五年六月一日であり、「出てこいニミツ、マッカーサー、出てくりゃ地獄にさかおとし」の日本人の大合唱のさなかに書かれた手紙なのである。

こうした時代に個人が思想の一貫性を保つたとしても、それで何ほどのことがなしとげられるわけでもない。しか

し、時代がかわって、人みなすべて民主主義を説く時におなじく民主主義を説くとしても、そのような集団の傾向への同調には、どれほどの根があると云えるだろうか。そのような集団への同調は、また時代がかわれば、すべて過ぎてゆくものであり、まじめにその思想に耳をかたむけるねうちの無いものではなからうか。個人の思想に、何かの重さがあるようではなからうか。個人の思想に、何かの重さという意味はないのではなからうか。

加藤周一は、「忠臣蔵症候群」という言葉をつかって、(主君浅野内匠頭のかんしゃく爆発による処刑に対して仕かえしをするというような)くだらない目標のためでも、そこに目標をいったんだめたならば、深謀遠慮、勇気と辛抱と相互扶助などの智力、美徳を結集して目標を達成する日本人の実行力を言いあらわしている。その実行力を支える団体主義は、きわめて困難な目標があたえられた時に、見事にそれを達成する。しかし、目標がどこへ行つたかわからないから、じっくり考えようという時には、実に無力であると批評する。(加藤周一・橋川文三「七七、日本のナショナリズム」『朝日ジャーナル』一九七七年二月三日号)

加藤はさらにすすんで、日本社会が西ヨーロッパや北アメリカとちがう点は個人主義がないところだと述べ、そし

国してからも、幾度か秘密の手紙を受取つたが、何時も返辞を書きませんでした。これはロシアのボルシェビキ革命運動が勃発するや、急遽故国に馳せて之に参与しようとした多くの先輩達が命からがらで再び西欧に逃げて帰つた数々の事実を知つてゐたので、私は何回かの勧誘に応じ得なかつたのであります。

モスクワの指令の下での国際共産主義の運動は、日・独・伊三国の軍国主義者に自分たちの野望を実現するよき口実をあたえた。

太平洋戦争が進展するに及んで「東亜共栄圏」とか「アジア被圧民族の解放」とかいふ美辞麗句が使用されるやうになつたが、それは却つて欺瞞策としか思はれない結果を呈しました。若し日本が真に東洋の盟主を以て任ずるのならば、先づ最初からその態度を明白にし、諸民族中の改革的自由主義者と結合すべきでありました。日華戦争及びその延長としての太平洋戦争は、日本としてはまことに恥づべき無名の師でありました。

このように十五年戦争を、東洋五千年の歴史の中で特長

て日本がアジアのほかの伝統的社会とちがう点は日本の団体主義が目標達成型であることだと述べた。この考え方をうけいれるとすれば、このような日本の社会思想の性格が不変である間は、石川三四郎は思想家として日本の伝統に根づくことができず、孤立した点としてとどまるということになる。

そのことを虚心にわれわれはうけいれるほうがいい。そして、その上で、われわれの思想的な存在様式の重さ(というよりも軽さ)をはかる分銅として、われらの時代の日本に、われわれから遠くはなれて石川三四郎の思想がかかっていることをくりかえし思い出すようにしたい。

『東洋文化史百講』の最終巻である第四巻は、戦争末期にあらかた書きあげられていたが、その出版は、戦後の一九四八年一月になり、題名も『近世東洋文化史』と改められ、発行所も大雅堂にかわつた。

敗戦直後の感想として著者は「第二章 余記的結論」の中で、次のように書いた。

私はロシアにボルシェビキ革命が勃発した際、当時ニューヨークにゐた片山潜君からロシア行の勧誘を受けたが、様々の理由で之に応じませんでした。大正十年に帰つけた上で、戦後の日本にとっての目標を、次のように見た。

今、日本には祖国の再建といふことが叫ばれてゐます。しかし再建といふやうな回顧的な思想では、今日の我々の使命は達成し得ないであります。東洋諸民族は今こそ相互に手を携へて新社会・新文化の創造に邁進すべきであります。蒙古西方、タルバガタイの峻嶺から吹きおろす黄塵万丈の嵐は、東亜諸民族の文化にどれほど影響するかを考へて見ませう。毎年夏から秋にかけて太平洋の沖合に吹き起る颶風が、我々東洋諸民族の生活にどれほど影響するかを考へて見ませう。西蔵の高地から流出する黄河や揚子江やの濁流は太平洋の水をも黄色ならしめます。南太平洋から北上する黒潮が、夏にカムチャッカから南流する寒潮が如何に我々の海洋生活に影響すること多大であるかは何人もよく知るところであります。太平洋と東亜大陸とは、一つの気流が空を蔽ひ、一筋の浪が海を支配してゐます。世界の文化が一つになり一味になりつつある時、東洋民族が一味になり得ないならば、それは遂に世界の進運に落伍することを表示するに外ならないであります。太平洋文化は近き將

来に於て世界文化の中心となるべき地理的並びに歴史的  
天恵を持ったものであります。そしてその大きな文化の  
開拓を擔当する者は我々太平洋岸の諸民族を描いて他に  
ないのであります。

石川三四郎は、彼の東洋文化史研究の末尾に書いたこの  
一節の前に、まずはじめに日本が軍備全廃・戦争放棄を規  
定した新憲法によって東洋文化史の一転機とすべきだと言  
い、この憲法の精神をもととして何よりも先に日韓両国の  
「民衆的結合」があるべきで、さらに「太平洋諸民族が自  
由にして平等なる協同生活を展開することによつて」太平  
洋文化があらわれると述べた。

このように太平洋諸民族の自由にして平等な結合の一部  
に日本人がなる際に、いとぐちとなるのは、石川が正時  
代からすでに日本人を「土民」としてとらえているという  
その鍵概念である。欧米語から輸入した「デモクラシー」  
という言葉が日本語にひきうつす時に、石川は「土民生活」  
という言葉をあてた。日本人を土民としてとらえ、石川自  
身がひとりの土民となつてその老年にいたるまで土をたが  
や山野菜をつくり山羊をかってくらしつづけることをとお  
して、彼は自分のささやかなそぶりによつて、太平洋文化

の未来を示した。

十五年戦争の中の一つ一つの事件に心をうばわれること  
なく、石川三四郎が自分の思想を守り得たのは、彼がいつ  
も太古以来の人間の土民としての文化のうねりの中に自分  
をおいていたからであり、一刻として彼とはなれることの  
ないこのリズムの感覚が、雄大なほらのようにさえびく  
その太平洋文化の構想を彼の一瞬の身ぶりにつなぎとめて  
いた。だから彼の戦後の探究には、無理な努力は感じられ  
ず、自然な姿がある。

(昭和53・3)

### 戦後の石川先生

——土民生活とコスモポリト

栗原貞子

石川先生に初めてお会いしたのは、一九四九年五月、船  
橋の家におたずねしたときだった。千歳船橋の家はその当  
時武蔵野の雑木林の中にあり、先生の土民生活の現場であ  
った。先生自らしぼって下さった濃い山羊の乳と畑でとれ  
た苺を御馳走になったことを記憶している。土民生活とい

うと一般的には耳馴れなくて、土を這う農民の暗く重い生  
活を感じさせるが、おだやかな人間のやさしさにあふれた

先生の風貌と知的で簡素な土に根ざした生活の雰囲気は、  
先生の知行合一のライフ・スタイルそのものであった。

二度目にお会いしたのは、それから間もない頃山陽地方  
の講演旅行のときだったように思われるのであるが……。

行動美論をとらえ、社会美学としての無政府主義を説か  
れる先生は、フランス生活の名残りのように黒や茶のピロ  
ウドの背広を好んで着用しておられたようだった。

広島へは茶の洋服を着て来られた。その時、九州から広島  
へ馳せつけた大杉栄の長女の慶子さんと東京から同行され  
た岩佐老人、遠藤斌、綿引邦農夫さんと宮島に行ったと  
きの記念写真〔本著作集 第四巻所収〕が残っている。

石川先生は広島での講演の中で「ギリシャの哲人が昼  
間、提灯をともして街を歩いた」と言う逸話を引用して少  
数派の孤獨な運動の理想を切々として説かれた。

幼児期から法律を守ることと、強権にしたがうことをた  
えず教えこまれ、自由な創造力を失ってしまった社会で、一  
方で破壊主義者、無法者とそしられ、一方からは空想的ニ  
ートビアンと嘲笑されながら、先生は「無政府は最高の秩  
序なり」と個人の創造的発意とその自由な合意、美的本能

としての革命の理想を説き、個人の意志を抜きにした唯物  
弁証法の必然論を機械論として斥けられた。

先生は戦後『平民新聞』を始め各地方から出しているミニ  
コミ紙、パンフレットなどに、依頼されると評論や随筆を  
気軽に引き受けて若い人をはげまし、地方への講演旅行に  
も精力的にとりくまれました。私が編集していた文芸雑誌『リ  
ベルテ』（五号で終刊）の三号（昭二四・四）にも「収穫」（ソ  
ラの“messidor”の詩想）を戯曲として書きおろして下さ  
ったし、『広島生活新聞』（昭二七・八・一）のアンケートには  
次のような回答をいただいた。〔本著作集 第四巻所収〕

一略—今となつては致方ありませんが、私は広島の大部  
分を爆破のまゝ荒野にして置きたかつたです。……人類  
の招いた傷痕はそのまゝ保存するのが後世の教訓であり  
贈り物であります。平和の教訓としてこれ以上のものは  
ない筈です。大学など建てるよりこの方が効果的です。

その当時タイムズ社の記者が『文藝春秋』に広島印象記  
を発表し「広島市民は最初の原爆体験者と言う特権意識を  
もち、市役所も市民もそれを商業主義に利用している」と  
批判した。こうした批判をめぐって「広島市民は平和のと

めに何をなすべきか」のアンケートをおねがいし、峠三吉、荒正人、細田民樹、浜井広島市長氏など十八名から回答をいただいた。石川先生の前記の回答はユニークだった。先生の『歴史哲学序論』（昭二四・八弘文社）の冒頭には次のような歴史観がのべられている。

——殊に喧擾を極める現時於いて、近代文化史が切々として吾々に訴へるものは、人類葬送の挽歌の如くにも感ぜられる。……人間史はたゞ電光の如き、石火の如き、生滅の反覆に外ならない。……如何なる強権も永続せず、如何なる政庁も長久ならず、……無常と言ふよりは寧ろ諸時無政府と言ふべきである。

世界の人類は、歴史開闢以来、尚ほ強権と暴庄に対し、また虚偽、欺瞞、醜悪に対して戦ふことを止めない。……一縷の希望を托し得る点はこゝにある。

先生は自身の歴史観にもとづいて、遠くはギリシャ、ローマの廢墟、近くは第二次大戦のナチの惨劇の跡をそのまま保存したオラドル村や日本軍の南京虐殺の跡と同様、「人類葬送」の愚拳、惨禍をまるごととめておくべきだったと指摘されたのだった。

石川先生は日露戦争で非戦論をとなえ、一九一三年に権力に追われて日本を脱出し、ブリュッセルに滞留中、第一次大戦に遭遇し彼の地で反戦運動に参加し、帰国後始まった十五年戦争にも筋をまげることなく平和主義に徹し、生涯をコスモポリトとして生きられたのであった。

先生の歿後既に二十二年、私たちの生きている現実はずます自然から遠ざかり、産軍複合の巨大な技術文明によつて心身ともにむしばまれ、人類絶滅の終末感におびえながら自己放棄を迫られている。

資源の濫費・土地の乱開発による自然破壊・産業汚染・放射能汚染による人間腐蝕と解体の現代文明からどのようにして脱出するか。石川先生はエドワード・カーペンターとエリゼ・リクリュを受けて土民哲学論を書き、自然回帰の土民生活の中に自由を見られた。

土地を資産・商品として見ることなく生命を持った土であり、自然であり、生きた人間労働と結合し、自然と共生することを人間生活の根源とせられた。

私は石川先生の著作をよみかえし今日に生きる指針を改めて学んぶ思いであった。

（昭和53・1）

原爆体験の風化とともに米ソの核競争が宇宙にまでひろがり、人類絶滅の様相を深めている時、核からの人間解放について社会主義も共産主義もこたえることは出来ない。社会主義国ソ連は米国とともに核競争のしごきを削り、中国も又そのあとを追いつ、フランス共産党も自国の核武装を容認した。それにこたえるものは国家を越える思想しかあり得ない。

大沢正道氏編集の『アフランシ』12号（昭二七・六・一）に石川先生は『インタナショナル』とコスモポリト【著作集第四巻所収】の評論を書き、第一次大戦のヨーロッパの反戦運動の体験にもとづいて次のようにのべておられるのである。

インタナショナルの運動はナショナルイズムの反動または変型であつた。  
コスモポリトの精神を欠いたインタナショナルは武装した平和運動である。

……第一次大戦後に組織せられた国際連盟も殆んど見るべき功績を残さず終り、今日存する国際連合も、いたずらに立派な憲章を擁して、日夜残酷な冷熱両戦争に忙殺されてゐる。

### 坂をのぼる葬列 緒方昇

武蔵野の枯葉道を降りてゆくと  
三十年前の風景が展けていました

はだかのクヌギ林

水の涸れた田んぼ

黒松の下の稲小積み

枝折戸のわきのサルスベリ

裏口の杉並木

小川のほとりには

水車小屋の跡もありました

私は三十年ぶりにここを訪れたのです

昔のままの景色と、いいましたが

むろん大きな変化もあります

塵芥処理場のコンクリ煙突や

二つの巨大な球形の瓦斯タンクが

鼻のさきに眼をむいている

「さ、早く、オヤジに会つてくれ」

まわりのだれかに声かけられ

私は玄關をあがります

「即身説法」

北魏時代、泰山谿谷の大岩石に刻まれた

金剛経の石拓を集めた四字の扁額

その下の座敷に

棺は置かれてありました

棺の上にはさまざまの草の花

棺の前には故人の著書教冊

ほかに何の飾りもありません

私は棺の蓋をずらして

石川三四郎翁と対面しました

おそらくはわが国最後の社会思想家

終生めとらず

つねに民衆とともにあつた

誇り高き放浪の革命家——

「偉大なる孤独

そのとき

米軍のジェット機が飛んできました

爆音はたちまち

楽の音を消してしまいます

弾奏はつづけられ

ジェット機は去つてゆく

棺は大きな黒旗で覆われ

古い同志たちが担ぎました

白髪を長く垂れた人

なかにはステッキを片手に

歩行に不自由な人もいる

苦難の年輪を思わせるそれぞれの後ろ姿

うたごえも旗の波もありません

「死屍固く冷えぬ間に

血潮は旗を染めぬ

高く立て黒旗を……」

私は心のなかでうたいながら

葬列のあとについて

落葉の坂をのぼつてゆきました

（昭和31・11・29——『ひろば』第七号、昭和三十二年十月）

ここに眠る」

いえばそういえる安らかな死顔でした

——ひとに迷惑をかけぬよう

——ひとの邪魔をしないよう

——なるべくはひとに知られず葬つてくれ

大エリゼ・ルクリュの遺言

と同じことばをいい残して

故人は八十歳の生涯を終つたのです

行われたのは葬儀ではない

告別式でもない

あらゆる宗教から超絶し

一切の儀式が拒否されました

同志近藤憲二のあいさつのあと

日ごろかわいがつてもらつた

近所のお嬢さん（諏訪あき子）が

棺のなかをのぞきこむような姿勢で

バイオリンの弓をとりあげます

——シューベルトの『アペマリア』

曲の調べは低く高く

あたりに滲みわたつてゆきます

石川さんのはなし

下中弥三郎

石川さんからききました話で一番ふかく記憶している話をひとついたします。石川さんがフランスに居られたとき、ソレルのサンチカリスムの運動に、ルクリュ一家の方だと思いますが、自分は老いてしまつて革命運動にお役にたてない。せめて宣伝文の封筒だけでも皆の中にまじつて手伝いたいといつて、お年寄がやつて居られたということをお話されたんです。若い人々の力になることが出来ない、革命のためにつくすことができない、せめても小石一かけらの力、封筒に糊をつけてはることも手つだいたい、といつたということを書いて、私は非常に感激したのであります。石川さんはルクリュ一家と大そう親しくされていて、フランスから帰つてこられて、『自由人の放浪記』という本を私ども（平凡社）から出版したことがありましたが、何回か逢ううちに、思い増す人とはこういう人を用